

會 報

大日本耳鼻咽喉科會中國地方會記事

幹事 小田大吉記

昭和8年11月26日午後1時より岡山醫科大學第1講堂に於て第25回地方會を開催せ

1) Coutard 氏照射法に依て治癒せる 上顎内皮細胞腫の1例

杉山悦子君

演者は1例の上顎内皮細胞腫に對して Coutard 氏分割遷延照射を試みし経験に就て述べたり。即ち63歳の男子、昭和8年4月4日數年來の右鼻閉塞及び惡臭あり且血液を混ぜる鼻漏並に1年以來の右側頰部の神経痛様疼痛、約20日來此部の腫脹及び口蓋右側の穿孔を訴へて岡山醫科大學耳鼻咽喉科教室外來診察室を訪ふ。一般状態良好ならざる男子、右頰部は腫脹し、觸るに右眼窩下縁は鈍となり、右眼窩底も膨隆し、犬齒窩に於ては上顎骨の膨隆せるを觸れ、更に鼻鏡検査上右鼻腔は其の側壁より出たる硬き、表面粗なる腫瘍塊を以て充たされ、口腔に於ては右上齒槽突起は硬口蓋右半部と共に腫脹し、硬口蓋右半部には肉芽を以て充たされたる、鼻腔に交通せる瘻孔あり、且齒牙は脱落し、中等度の牙關緊急あり。之等の所見は上顎悪性腫瘍、殊に一見癌腫を疑はしめしも、其の経過之に一致せず、よつて組織的検査を試みしに淋巴管性内皮細胞腫なりき。之に對して患者の希望其の他の理由により放射線療法を行ふの方針をとり、近來注意さるるに至りし Coutard 氏分割遷延照射(1回量 $\frac{1}{2}$ H.E.D 毎日1回、連日(10回照射)を試みしに第1回治療後3週間にして鼻閉

塞去り、1箇月にして頰部の腫脹、鼻腔内の腫瘍消失し、目下治療の状態に在り。一般に内皮細胞腫は咽頭及び口蓋に發生せしものは多く良性なるに反して鼻及び副鼻腔に來るものは主として悪性にして本例も治療開始當時既に上顎骨の大部分の破壊せられ居りしものなるにも拘らず、分割遷延照射に據つて著しき治療的效果を見たるものにして、以て上顎悪性腫瘍治療研究の一小資料とす可しと述べたり。

追加

小田大吉君

悪性腫瘍の Röntgen 深部療法に當りて從來一般に行はれし、大量一時照射を旨とする所謂舊法の効果が婦人科領域以外に於ては疑はしく、且其の全身に對する影響大なる缺點あるに對して、近來之を分割して比較的少量を反覆照射せんとする傾向に在り。殊に Coutard の分割遷延照射は結局 Röntgen 線を「ラヂウム」様に用ひんとするものにして Coutard は耳鼻咽喉科領域の悪性腫瘍に對して良好なる成績を挙げ得たるを報告せり。之は余等の教室に於て「ラヂウム」療法に於て大量一時照射を排し、腫瘍内に比較的少量を長く用ふるに至つて著效を見たる経験に一致する所にして大なる興味を感ぜしむるものなり、

2) 聾啞兒の殘聽に就て

美田隆紀君
大饗律治君

演者等は岡山縣立盲啞學校聾啞部生徒の聽力檢

査を行ひ、其の成績の一部を報告せり、

検査人員は50名、其の失官原因は後天性17名、(腦膜炎、腦脊髄膜炎7名、熱性流行病4名、外傷2名、麻疹中耳炎、出産時外傷、流感各1名)先天性20名(血族結婚に於ける兒童16名、血族中に聾啞あるもの4名)、原因不明13名。聽力検査はBezold-Edelmann氏連續音列及び「オートアウデオ」により、今回は前者による成績に就て述べしが、其の際智能程度低く其の検査成績に信を措く能はざるもの3名を除き、47名の成績は、完全聾23耳(24.5%)部分聾71耳(75.5%)にして、Bezoldの分類によれば第1類、24耳(25.5%)第2類、10(耳10.7%)第3類、無し。第4類、5耳(5.3%)第5類、10耳(10.7%)第6類、22耳(20.4%)なり。其の成績を見るに高音部聴取者多く低音部聴取者の少きは一般に認めらるる神經性難聴に於ては上音階下降するとの見解に一致せざる處なれども、之は閉管及びGalton氏笛は音又に比して其の音著しく強きに因るものならん。且又連續音又に於ては音源の強さを一定ならしむること困難なるものにして精密なる検査に不適番なる點あり。偵者等は續いて更に「オートアウデオ」を用ひて之を観察せんとす。其の成績に就ては次の機會に報告す可し。

3) 口蓋扁桃腺乳嚢腫の1例

川 本 重 雄 君

口蓋扁桃腺より發生せる乳嚢腫の稀なるを述べ、偵者の觀察せる1例を之に加へ、其の原因に關する學説を紹介せり。症例は20歳の男子、既往症に特記す可きもの無く、殊に安魏那に罹患せる事なし。喫煙するも飲酒せず。扁桃腺肥大せる故を以て其の摘出を希望し來たる。口蓋扁桃腺は兩側共に中等度に肥大し左側扁桃腺の上極に小豆大の腫瘍突出す。淡紅色、粟粒或は更に少なる球状

の腫瘍密集せるものにして全體として廣き基底を以て扁桃腺に附着す。組織學的には厚く増殖せる扁平上皮が有する乳嚢腫にして上皮下は血管を有する僅少の結締織より成り、腫瘍の基底は上皮下結締織にして其の内方に於て始めて扁桃腺固有組織を見たり。

追 加

小 田 大 吉 君

余は厥つて口蓋扁桃腺全體の乳嚢腫狀を呈せるものを摘出し、之を組織的に検査せしに、眞性の腫瘍に非ずして扁桃腺固有組織の乳嚢腫狀増殖なるを認めたり。之は偵者の例と異なるものなれども、斯かるもの存在することも亦、扁桃腺良性腫瘍研究上聊か注意す可き一資料なる可し。

4) 鼻腔内に見たる甲状腺組織に就て

藏 本 養 三 君

患者、宮川某女、55歳、昭和8年4月24日初診。約1箇月前より右側鼻閉感あり。10日前より閉塞感増悪、且左側鼻漏多量にして、時に血液を混ず。顔面には異常無きも鼻鏡検査上右側鼻腔は表面稍々凸凹ある腫瘍塊を以て閉塞され、觸るるに一部はかなり硬く一部は比較的軟にして、容易に出血す。悪性腫瘍の疑ひの下に試験摘出を試みんとせしも尙ほ精しく探診するに此腫瘍は周圍に對して癒着無く、中鼻道に基部を有するを以て、試みに寒蹄係を以て摘出せしに容易に腫瘍全部を摘出し得。且之が中鼻道粘膜より莖を以て發生せるものなりしを確めたり。半透明なる點は鼻茸の如きも、硬度及び表面の性質は之に一致せず、組織的検査を施せしに意外にも甲状腺組織よりなるを知れり。偵者の調査せる範圍に於ては斯くの如く甲状腺組織の鼻腔内に存在せし記載を見ざりき。

5) 「クロローム」に就て

齊藤 貞 邦 君

先づ最近演者が経験せる「クロローム」の1例に就て述べたり。患者は1年11箇月の女兒にして先づ右側顳額部の腫脹並に右側顔面神経不全麻痺、次で左側にも同様の變化を現はしたり。患者は急速に衰弱し、顔色は蒼白と成り、食慾く屢々嘔吐す。内科、耳鼻咽喉科、外科等の數名の醫師に依りて診斷不明、或は乳嘴突起炎、先天性梅毒、¹⁾ 淋菌織炎性淋巴腺炎の病名を附され、最後に岡山醫大耳鼻咽喉科外來を訪づれたり。此時は發病後約20日なりしが、既に高度の貧血あり、兩側顳額部の腫脹、兩側顔面神経不全麻痺及び兩耳の高度の難聴の外に、口腔粘膜には多數の溢血點あり、且兩側眼球突出を認めたり。病歴及び所見より頭蓋「クロローム」の定型的のものと推定せられたるが、直ちに血液の検査を行ひたるに赤血球數180萬、「ヘモグロビン」含有量24%、白血球數は11,700、白血球の大多數を占むるは「オキシターゼ」反應に依りて骨髓性細胞なる事を知り得たる一見大及び小淋球様の細胞なりき。試みに右側の顳骨弓の腫脹には「ラヂウム」の Dominici 氏管を當てたるに數日後には腫脹殆ど全く消失せり。次で左側の腫脹部には「レントゲン」線を少量頻回に用ひんと企てたるに1回の照射にて既に著しき腫脹減退を認めたり。かかる局所の状態に反し一般状態は次第に悪化し、血液像亦漸次病的の度を増せるが、發病後50日にして遂に死亡せり。此症例に於て特に演者の注意を惹きしは、此患者は定型的の頭蓋「クロローム」の所見を有したるに拘らず、始め數人の醫師に依りて誤診せられたる點なり。文獻を見るに本疾患は誤診せられたる例甚だ多く、爲に適應せざる手術的操作を加へられたるもの尠しとせず。此疾患は稀なりとは謂へども其の過半数に於ては我が耳鼻科領域の病變を有す

るものなれば我々耳鼻科醫は常に此疾患の臨牀的症狀を念頭に止め置く必要ある可しと痛感せり。

6) 慢性中耳炎に合併せる破傷風¹⁾の治驗例

窪 田 稷 君

16歳の女工。小學校時代數回左側耳痛を訴へ、以來同側に軽度の難聴を有せしが、約20日前左側耳痛を來たし、次で耳下部に發赤腫脹を來たし切開排膿を受けたり。然るに其の後1週間にして牙關緊急、續いて全身に痙攣現はる。9月18日左側耳痛、牙關緊急及び痙攣を主訴として中央病院耳科外來を訪ふ。慢性中耳炎並に破傷風の診斷の下に中耳根治手術を行ひ大なる眞珠腫を發見し且耳下部の手術創は此眞珠腫を有する乳嘴突起部の腔洞に交通せるを探診し得たり。其の後破傷風の治療を施し幸に全治退院せり。演者は本例は其の既往症に於て耳以外身體他部に何等の創傷を受けたる事無きに鑑み、恐らく此破傷風は耳下部の切開創或は外聽道より直接中耳の病竈に於て感染せしものならんと推定せり。

7) 上顎齶性鼻茸の1例

窪 田 稷 君

23歳の女工。慢性上顎齶炎兼鼻茸の診斷の下に上顎齶炎根治手術を行ふ。此際鼻茸は2箇ありしが何れも上顎齶粘膜より發生し齶副開口部を経て鼻腔内に出でたるを認めたり。即ち久保教授の上顎齶性鼻茸に該當するものなり。斯かる上顎齶性の鼻茸は凡そ孤立性鼻茸と唱へらるるが如く孤立性に來たるを一般となし、本例の如く2箇の鼻茸の同時に見らるるは稀有とす可し。上顎齶性鼻茸が鼻腔内に現はるる原因に關しては Grünwald Killian, Hajeck 及び久保の諸説あるも演者は本例に於ては其の何れのみをもつても説明する能はず、寧ろ其の總てをもつて説明する可きものとなせり。

8) 安魏那性敗血症に就て

守屋 誠君

演者は重症の安魏那、殊に壞疽性安魏那の際屢々敗血症を合併する事あるは周知の事なるも、近來單純なる安魏那例へば濾腫性安魏那或は腺窩性安魏那の後にも敗血症の合併し來る事あるを認めらるに至りしは臨牀上注意すべきものなるを述べ、最近演者の遭遇せし1例に就て述べたり。患者、西島某、16歳の男、昭和8年10月16日濾胞性安魏那に罹り軽度の發熱を見しが、3日後突然惡寒戰慄を以て39度2分に達し頭痛及び全身違和を訴へ、翌日は9度2分翌々日は40度4分に達し、其の際右側頸部淋巴腺の壓痛腫脹殊に瀰漫性の浸潤を來たせり。即ち大體の臨牀的所見は濾胞性安魏那なるも、惡寒戰慄を有する高熱、全身症狀、頸腺所見よりして、尙ほ又從來安魏那性敗血症は注意して之を見れば案外稀ならざる可しとの田中教授の注意を想起し、惡寒戰慄を以て高熱を來たせし第2日に於て血液培養を試みしに葡萄狀球菌を證明、更に其の翌日も念のため血液培養を試みしに同様の成績を得、且血液所見も白血球總數17000。著明なる核の左方移動を示し、之等の諸點よりして敗血症を合併せるを知れり。之に對して22日以後輸血、「トリパフラグイン」及びRinger Lock 氏液を以て治療せしに2日にして體溫下降し始め1週間にして平熱に復し、引き続き全治せり。

尙ほ演者は安魏那性敗血症に於ける血行傳染の成立に關して 1. 扁桃腺周圍組織の蜂窩織炎の直接靜脈壁に波及し靜脈血栓を形成し次で敗血症を來たす。2. 所屬淋巴腺の化膿し之が靜脈壁に破裂して靜脈炎を來たし敗血症に移行す。3. 扁桃腺病竈に於て先づ細靜脈の血栓を形成し、之より循環系統に傳染すとの3説あるを紹介し、之に關連して演者等の教室に於て松谷が多數の慢性炎症に罹

れる口蓋扁桃腺に組織的検査を施し其の多數の例に於て扁桃腺組織の種々なる部位に血栓性靜脈炎を來たせるを認めたるを紹介し其の組織的所見を「エピチアスコープ」を用ひて供覽せり。

9) 聽器組織に於ける脂肪に就て

中村 博 郷君

聽器に於ける脂肪は既に古くより研究者の注意を惹きたるも、之等は主として、「オスミウム」處置又は普通の「チエロイデン」切片に脂肪染色をなしたる標本に就きて論じたるものにして、脂肪研究としては不十分なるを免れざる状態にありしに、渡邊淡水及び中道吉亮兩氏によりて始めて凍結切片による聽器脂肪の研究が行はれ聽器病理學上一大貢獻をなすに至れり。

演者は兩氏の方法による他田中教授の蝸牛殼骨軸剔出法によりて取り出せる神經組織のみを目的とする凍結切片をも作り、之等の切片に各種の脂肪染色を施し、以て「アトキシール」中毒海癩聽器に於ける脂肪を研究せり。而して本研究は尙ほ其の途上にあるものなれど、今日迄の結果より云へば、

1. 「コルチ」器は高度の變性を呈するものと雖も其の脂肪には特に著しき消長を認めず。
2. 聽神經纖維は病變輕度なる時は單に膨大及び狹窄を呈するのみなるも、更に侵さる時は遂に斷絶して、Schwannsch 氏細胞内に「ミエリン」球を出現し、漸次中性脂肪の反應を呈するに至り、又一方多數の脂肪顆粒細胞の出現を認め殊に血管周圍に集合する事多し。
3. 螺旋及び前庭神經節細胞には顯著なる變性を認め、細胞其の「マンテル」との間に大なる空隙を生じ核は偏位し細胞體には著明の脂肪顆粒の沈着を認めたりと述べ標本を供覽せり。

10) 臨牀瑣談

杉山 榮君

イ. 食道竝に氣管枝異物に就て

演者は大正13年開業以來診療せし食道及び氣管枝異物の内興味ありしものとして銅貨を一時に2枚有し而も2枚全く重なり居りしたため之がRöntgen検査上1枚なるかの如く見えしもの1例、患者自身には茶渣と誤認せられ居りし義齒の1例、其の他に就て述べたり。

ロ. 小兒の扁桃腺周圍膿瘍に就て

扁桃腺周圍膿瘍は小兒又は哺乳兒には極めて稀なりとせらるるも5歳及び6箇月の小兒に於て扁桃腺周圍膿瘍の各1例を見たるを報告せり。

11) 喉頭結核に對する手術的療法

の經驗

細 見 英 君

演者は喉頭結核にして一般状態佳良且肺所見の非進行性なる2例に對して手術的處置(喉頭内手術)を加へ、其の後良好の経過を取りつつある症例に就て、其の概要を紹介し、保存的療法によりて未だ充分の効果を期待し得ざる現状に於ては手術適有を有すると思はるる症例、即ち前述の如き、良好なる一般状態を有し喉頭内の變化比較的限局性なるものに對しては、之に進んで手術的處置を施さば、極めて好結果を期待し得るものもある可しと述べたり。

追 加

田 中 文 男 君

結核性病變が主として會厭に限局せる場合には手術的療法頗有效なるが、之が聲門部に占位するものに對しての喉頭内手術の成績はあまり良ろしからず、余はこのあるものに對しては喉頭截開術の有効なる可きを思ひ目下試験中である。

12) 最近に於ける「ラヂウム」針腫瘍内刺入療法に據る鼻咽腔惡性腫瘍治療成績

小 田 大 吉 君

演者等は鼻咽喉の惡性腫瘍に對してRöntgen線の大量一時照射を旨とする舊法に據る深部治療及びDominici氏筒形「ラヂウム」を表面に用ひて可及的大量を一時に與へんとせし時代には僅かに肉腫の原發竈に對して相當の成績を擧げ得たるに過ぎざりしが、其の後Harmer Fraser等の研究に刺戟されて昭和3年以來「ラヂウム」針を腫瘍内に刺入し長く照射する方針を取りて以來單に肉腫のみならず、癌腫に對しても顯著なる効果を見るに至れり。此際演者は鼻腔及び副鼻腔の腫瘍に對して上顎竇には多く鼻腔内より其の竇壁を通じて、時には犬齒窩より、或は口蓋より、篩骨蜂巢には、或は眼窩内背部より骨を除きて、或は鼻腔内より、咽頭腫瘍に對しては或は直接に、或は側頸部より、喉頭癌に對しては、外癌には舌骨甲状膜を通して、内癌には甲状軟骨に瘻狀切除を施して之より、食道癌に對しては直達鏡を用ひて、直接腫瘍組織内に刺入せり。「ラヂウム」は1本5.5mgのものを1乃至數本刺入連日其の儘にして全量約2000mg時間に達せしむるを大體の規準とし、1乃至2箇月の間隔を以て照射せり。此方針によつて治療せし昨年1月以來の鼻咽喉惡性腫瘍の總數76(鼻及び副鼻腔癌腫16例、副鼻腔肉腫4例、咽頭癌腫6例、口蓋癌腫3例、舌癌2例、口唇癌1例、喉頭癌28例、食道癌13例)にして、之等は大多數既に進行せるものにして喉頭癌の如きは既に氣管切開を施されて來院、時又は來院當時又は數日後氣管切開を施せしもの大多數ありしが、之に對して「ラヂウム」針腫瘍内刺入療法を行ひしに2,3の例を除きては何れも腫瘍の著明なる縮小及び一般状態の輕快を見一時殆ど腫瘍の消失するもの少からず、目下1年以上全治の状態に在るもの喉頭癌5例、咽頭肉腫1例、2年に達するもの咽頭癌1例を見るを述べ之等の治療に當つて觀察せし行を述べたり。

13) 迷路摘出の2例

小田大吉君

演者は其の最近手術的に治療し全治せしめ得たる2例の迷路炎に就て其の概要を述べ、文献及び演者等の教室に於ける症例より迷路炎の治療方針に就て統計的見地より観察を試みたり。

第1例小林某男、左慢性中耳化膿症の急性發症(眞珠腫化膿)に次ぐ内耳炎、1週間前より眩暈嘔吐あり。來院當時他覺的には反對側に向つて倒れ、患例に向ふ眼球震盪、嚔孔症狀を有し、頭痛激烈、中耳根治手術を行ひ水平半規管に嚔孔を發見。6日後迷路機能脱落するを待つて迷路手術。3週間にして眩暈去り、其の後圓滑に全治。

第2例、内海某男、左側粘液性連菌性中耳炎に合併せる内耳炎、2週間前眩暈嘔吐あり。以來頭痛甚だし。來院當時眼震は既に無かりしも、聾にして患側は倒れ廻轉刺戟には左右略ぼ同様に反應するも患側温熱刺戟に反應せず。中耳根治手術を行ふに中及び後頭蓋腔に大なる硬腦膜外膿瘍あり同時に迷路手術を行ふ。其の後圓滑に經過。

即ち第1例は來院當時尙ほ迷路機能殘存せしを以て其の大部分の脱落を待つて迷路手術を行ひ、第2例は既往症及び現症よりして稍々陳舊なる迷路炎の存在を推定せしに手術によりて果して然るを認めしものにして共に其の後圓滑に全治せり。

演者は更に演者等の教室に於て近年遭遇せし迷路炎(化膿性)の統計的觀察を試み、即ち迷路炎22例中保存的療法を試みしもの14例、内全治5例、腦膜炎を起せしもの7例、敗血症を起せしもの1例、即ち合併症を起せしもの計8例、非合併迷路炎にして迷路手術を行ひしもの18例、内1例死亡(腦膜炎)尙ほ保存的療法を行ひしもの内腦膜炎を起せし7例は腦膜炎合併後迷路手術を行ひしもの1例を救ひ得たるのみ、即ち迷路炎を保存的に治療せしものの死亡率は外國の文献よりの

統計に略ぼ一致して $\frac{1}{2}$ に達し、手術的療法を施せしものに於ては $\frac{1}{2}$ に過ぎざりしを紹介し、適當の適示の下に行へば手術的療法を選ぶ方可ならんと述べたり。尙ほ適示に關しては次の機會に譲れり。

追 加

田中文男君

迷路炎に於ては比較的症狀輕く經過し爲めに其の存在を看過すること少からざる可く、又迷路炎にして既に頭蓋内合併症殊に腦膜炎を合併せる際にも其の初期に於ては既に腦膜炎の合併せるを看過すること亦少からず。迷路炎療法の統計的觀察を試みるに當つては此點に當意するの要あり。

14) 聽器微毒症例

西尾修五郎君

37歳の男子の顔面神經麻痺を伴へる微毒性乳嘴突起炎に就ての臨牀的觀察を述べたり。

15) 濾胞性齒牙囊腫に就て

股野景一君

第1例、齶齒無く左上第2門齒を缺如する43歳の女。上顎門齒部に發生せる濾胞性齒牙囊腫、腫瘍は左右に擴がりて瓢形をなし、左房は拇指頭大、右房は示指頭大にして内に小齶齒様の完成齒牙1箇を有す。之に對してパーチ氏第1法を行ひしも數箇月間嚔孔を残せり。

第2例、齶齒無く左上第2小齶齒を缺如せる19歳の女、左上顎大齒窩に發生せる濾胞性囊腫にして逆生埋没齒を有す。腫瘍は鳩卵大にして前者より大なりしも、Denker氏療法により手術。1箇月にして全治せり。

演者は濾胞性齒牙囊腫は從來下顎に好發するものとせらるるも近年の報告に見るに上顎にも多く上下略ぼ同數を示すを指摘し自例も共に上顎に在

りしことを注意し、尙ほ療法としては Denker 氏法を推奨せり。

16) 實扶的里患者死亡例の 2—3

北野伊八郎君

實扶的里患者に於て電撃性に來たりし心臓麻痺の 4 例を述べ、實扶的里患者の診療に當つて例へ體温表に於ては一見輕快せるが如き觀を呈せるものに於ても嘔吐腹痛の如き胃腸障礙の現はれしものに於ては豫後判定に當つては慎重なるを要することを述べ、斯かる心臓麻痺を豫防するには「ヂフテリー、フォルモワクテン」の有効なるやに思はるるを述べたり。

追 加

東原尙一君

厥つて血清注射後經過良好なりしに突然心臓麻痺に陥り死亡し家族の理解を得る能はず遂に訴訟問題を惹起せし實扶的里の 1 例の苦き經驗を述べ、實扶的里患者の豫後に就ては極めて慎重なる可きを述べたり。

17) 上顎竇「ムコケーレ」の像を呈し

たる粘液肉腫

中出捨次郎君

前額の「ムコケーレ」は稀有ならざるに反して上顎竇の夫れに就ては報告極めて少し。

45 歳の男子。久しき以前より鼻閉塞を訴へ居りしが約 10 箇月前より左眼の流涙及び疼痛、約 5 箇月以來左眼球突出を來たせり。左眼は 10 突出、眼底に著變無し。左頬部及び口蓋強く膨隆。左鼻腔は下甲介より發生せる腫瘍を以て閉塞さる。組織的検査を行ひ粘液肉腫なるを證明せり。上顎竇内は黄色透明にして「コレステリン」結晶を含む液を以て満たされ、試みに針を以て穿刺するに穿孔孔より 30mm 以上も射出する液壓を有せり。骨組織は上顎竇上壁、内壁の全部、下壁の大部分、外

壁の一部破壊せらるるを認めたり。患者の希望により鼻腔内の腫瘍を摘出、上顎竇手術を準して手術的に處置せしに翌日眼球突出去れり。目下 Röntgen 深部療法を試みつつあり。

本例は下甲介の肉腫のために上顎竇は自然孔を閉塞され、爲めに上顎竇「ムコケーレ」の像を呈せるものにして、液壓のため骨壁侵され眼球突出を來たせしものならん。

18) 全摘出に據る喉頭癌の永久治癒

に「タビア」氏人工喉頭の應用供覽

田中文男君

演者は喉頭癌の手術的療法に關して、一定の適示の下に行はば喉頭 開術による永久治癒率は非常に良好にして 80 乃至 88% (Thomsen Gluek) に達するを紹介し、喉頭截開術に據つて全治せしめ得る時期、即ち癌組織が一方の聲唇に限局し而も前方は前連合に及ばず後方は聲突起に及ばず、聲唇の運動尙ほ制限されざる時期に之を發見、之に喉頭截開術を以て臨むを可となし。一昨々年の集談會に於て報告せし同様の 1 例は既に 2 年半經過して尙ほ再發の徵無きを述べ、斯かる時期に癌腫を發見せんには、癌年齢の人に於て 1 箇月以上聲音嘶嘎の持續する際は假令 Wassermann 反應陽性なりとも癌腫に疑を置きて精査す可く、且其の際 Semon の最初の見解に反して癌腫の初期に於ては聲唇はかなり長く其の可動性を保つものなるを注意し、更に此適示を起したるものに對しては喉頭全摘出を行ふ可し。唯此全摘出に於ては手術後患者は發聲不可能となり、此不便を數ふ可く從來種々の人工喉頭製作されしも不満足なるをまぬがれざりしが、演者はマドリッドに於て Tapin が優秀なる人工喉頭を供覽せるを見たり。演者は其の喉頭全摘出を施し其の後今日にて 3 年經過せる 48 歳の男子に此 Tapin 氏人工喉頭を應用し満足す可き成績を得たるを以て之を供覽し尙ほ其の

際喉頭全摘出に當りては原發竈のみならず頸部淋
 巴腺を内眼的に健康なる部分までも剷出すること
 の要諦なるを指摘せり。次で患者は閉塞性鼻音に
 近きも、明瞭なる會話語を以て、手術當時を回想
 して其の意外に苦痛少かりしこと及び治癒後も生
 命は救はれし幸福を感じるも言語を奪れしことの
 苦痛なりしこと、並に此人左喉頭の自然の聲に近
 く發聲亦容易なることを述べたり。

出席者

田中 文男君 西尾修五郎君 細見 英君
 渡邊久賀次君 菰口 武夫君 笠井 經夫君
 登坂 清喜君 吉田 千束君 藤森 眞治君
 掛谷 令三君 鷗山 義治君 股野 景一君
 北野伊八郎君 門脇 善次君 松森 明君
 田中 政治君 福武 敏重君 中出捨次郎君

原田 輝雄君 池上 甫君 杉山 榮君
 高越禪太郎君 河合 廉介君 宇野 善一君
 山脇 章君 松村 支郎君 鈴木 章君
 松浦 三郎君 富永 馥君 中村良太郎君
 浦上 正直君 中川 剛三君 三宅 信吉君
 原田 忠君 長野 寛治君 中島 壽夫君
 川本 重雄君 窪田 穰君 小田 大吉君
 中村 孟君 松谷 辰造君 中村 博郷君
 岡崎 衛生君 岡 貞邦君 藏本 養三君
 高原 滋夫君 星島 忠夫君 安原 功君
 大野勤次郎君 尾錢 二郎君 尾崎 巖衛君
 美田 隆紀君 大饗 律治君 杉山 悦子君
 石井 研二君 寺島 和周君

閉會後荒手茶寮に於て懇親會を催せり。